慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	石田雄著『「周辺から」の思考』
Sub Title	Takeshi Ishida, A thought of 'from periphery'
Author	内山, 秀夫(Uchiyama, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1982
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.55, No.2 (1982. 2) ,p.135- 140
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19820215-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

石田　雄　著

『「周辺から」の思考』

科学的に人間や人間の政治、あるいは人間の歴史を比較することはできない。科学的比較がよしあつたにしても、それは意味のある比較にはならない。そのことは、たとえばG・A・アーモンドが格闘して、ついに破れ去つた記録(Gabriel A. Almond, *Political Development : Essays in Heuristic Theory* 〔Boston : Little, Brown, 1970.〕内山秀夫ほか訳『現代政治学と歴史意識』勁草書房、一九八二年)に明らかなところである。

というのは、包摂的なモデルで被覆しても、分析概念を精緻化しても、あるいは類型論をいかに推敲してもそれはついにモデル化・分析・類型化でしかなく、生きている人間も、人間の生きているありさまも、そこには浮かびでてこないからである。言いかえれば、人間の政治はそうした科学を拒否したところで形成され進展するのであろうし、人間の歴史は分類や科学的分析を受けつけぬところで発現しているのだ、とも言えるかもしれない。だとすれば、政治を比較すること、つまり人間を比較するということは、いつたいどんなことなのだろう。

それはどんなことがあつても、自己を識るための営為であるにちがいない。しからば、なぜ自己は識られねばならないのか。自分がよりよく生きてゆくために、と答えることができよう。なぜ〝よりよく〟が命題になるのか。自己の現在を根本的に規定する社会的価値としての善が、いかなる社会部分からも提出されていないからである。言いかえれば、社会に内在する個人は、いかに努力しようとも、その社会の性質を規定することができないことが、現在の高度産業社会の特質であり、科学技術の可能性がただちに人間の可能性を規定することで、科学技術が社会規範の創り手になつていることから、善を見失う結果になつているからだ、と言わねばなるまい。

かくして、比較への努力は、ありうべき社会的価値としての善、つまりは人びとの生にむかうことにならざるをえない。しかし、その姿勢や関心のもち方は、いわば〝こちら〟からのものであつてはならない。政治学のこれまでの大部分の接近方法は、〝自己〟の位置を確定しておいて、そこから比較の目を放射することに固執していた。それは〝現地調査〟にあつても変わらない。必要なのは、現地から現地人の目、つまり現地人の価値観にできるかぎり立つことで〝自己〟を見定めることなのである。

言いかえれば、研究者が自己の中に比較の視座をもつ、ということの意味は、このようなものであつたはずである。さらに言うならば、こちらの自己をできるだけ捨てて、むこう側に立つ、というと

ころで、現代社会科学における主観と客観の問題が屹立しているのである。

私が本書に抱いた関心の主なものは、「日本の支配的な政治文化について『周辺から』見なおすことを通してこれを反省し、他文化との比較と相関の中でその特徴づけを行なうため、異つた文化の中にいる人々との対話のなかで自分の思考を発展させていこう」（「あとがき」）とする著者に、前述した《比較政治以後の比較》という私の関心との重なりを見いだしたからであつた。

一

しからば、著者のいう「『周辺から』の思考」とは何か。周辺に対するのは中央である。このCenter-Peripheryという考え方は、発展あるいは開発の波及とか、発展・開発の磁場として世界を想定したときの集中の方向という意味ですでに提示されていた。しかし、前述したように、七〇年代とりわけ八〇年代における人間の課題として、《生活を変える》（Changer la vie.）ことに人間の熱い視線が注がれるにいたつたとき、人間の生き暮らし方としての《周辺》のもつ人間らしさがむしろ理性的・知的に確認されるにいたつた。

著者の起点は、もちろん、こうした人間理性の構造変革にある。したがつて、「既存の文化の『中央』からみるのではなく、その『周辺』に身を置いてみることを『周辺から』の思考」と名づけ、「その一般的重要性は、既存の文化の『中央』からみた場合に見えないものが『周辺』から見えるということ、否、より積極的に『周辺』から『中央』文化の問題性を問いなおす必要性が生まれてくるところにある」（七頁）と著者は指摘する。

こういう言い方は、視角の方向の問題として、現実の「周辺から」の思考を考えれば、その意味は理解しにくい。というのは、「極度に寡占化、系列化が進行した管理社会では、『中央』の『中央』にいる人々はきわめて少数で、大部分の人が、一方では『周辺』にありながら、他方ではより『周辺』的な部分に対しては『中央』に位するという、無限の連鎖の中間に位置する」という事実、ならびに「その中間のどの辺に位置するかという客観的条件よりは、『中央』の考え方を疑うところなく受け入れて、自分より一層『周辺』的な部分を差別し、抑圧し、しかもそうした抑圧移譲を意識しないという『中央から』の視角を採用するか、それとも自分が『周辺』にいて『中央』から差別されていることを問題視し、同時に、自分がさらに一層の『周辺』に対して差別し、抑圧していたことを自覚して、『中央文化』の問題性を問いなおす姿勢をとるか」（十一頁）の姿勢が複合的にからみついているからである。

ここで著者は、だからこそ無限の努力がこれには必要になるのだとして、二つのポイントを指摘する。第一は、「『中央』と『周辺』の関係における差別と抑圧が無限の連鎖をなしており、その中における自己の位置づけを発見し、『周辺』からの視角を確立するということは、その連鎖が無限である以上、無限の努力を必要とする」（十一―二頁）ポイントである。第二は、「『中央』の論理は、実は無限に溯りうる文化的源泉を持つている。したがつて『中央』の文化に

対する問いなおしは、歴史をも溯る、これまた無限の努力を要請される」（十三頁）ポイントである。

このことは、結局のところ、周辺には無限の深さがある、ということへの確実な認識によらねばならない。すなわち、著者はここで陥りやすい陥穽を明確に指摘する。第一点は、自分が「周辺から」の視角を確立したと思いあがることで、それ以上の深さを切りすてしまうところである。第二点は、目で見ることのできる特定の周辺人と自己同一化を必要とする人々が、一種の虚偽意識にとらえられて、周辺人の見方をそのままに正しいとしてしまい、より周辺的な人びとを切り捨てることで、彼らからの批判を拒否することになつてしまうところである。「ある特定の『周辺』人や『周辺』集団に疑うことなく同調することは、『周辺』の無限性を無視し、より『周辺』的なものを切り捨てる結果になる。」（十二頁）

つまり、この無限性は「中央」にも「周辺」にも成立するのであり、現在という歴史的時点に立つことのむずかしさを身にしみて識ることを要求しているのである。この思考の無限性要求は、実に、現在のわれわれにとつて不可避必然な位相である。そのことは、現在のわれわれが、《世界の中の日本》を考えるときに陥つている事態を明らかにしているからである。その事態を著者は以下のように指摘している。

第一は、日本における近代化あるいは発展を成功とみなす自信にかかわる事態である。そうした自信は、本質的に、たとえば公害犠牲者などの「周辺」の無視ないし軽視につながる。そしてまた、こうした周辺の視角・周辺的な発言は、地域繁栄の阻碍要因とのみ評価される。こうした国内への自信は、第二の経済大国としての自信に容易に反転する。それはほとんど優越者の意識あるいは行動を誘発する。したがつて、優越的慈恵主義の心性が、そうした私たちがいかに見られているか、の感受性を失わしめる。

この事態はもう一つの位相を含んでいる、と著者は指摘している。つまり、当該国の「中央」に視点を合わせて、その「周辺」を見落すという、もう一つの中央－周辺関係の欠落可能性である。これは、経済援助・技術援助につきまとうところである。すなわち、そうした援助は中央特権層からすればプラスの発展イメージに結ぶが、大衆側からすれば大衆の犠牲による発展としか映らない。したがつて、中央と中央の合意による発展・開発計画が、大衆の抗議運動にでくわすことになる。「実際、日本の内で『中央』の文化を疑うことなく受け入れ、『周辺』の下位文化が異るということに感受性を持たない人は、日本と外国との関係においても、文化の違い（すなわち考え方の違い）についての感受性を持ちえない。まして外国の中の『中心』と『周辺』の違いについては考えてみようともしない」（十七頁）と著者は指摘している。

言いかえれば、本書は著者が「経験を概念化する方法」としての文化をさぐることで、このような感受能力をみずからに培かうための経験の概念化への試みとして読めるはずである。それは著者が『政治と文化』や『日本の政治文化』あるいは『メヒコと日本人』（いずれも東大出版会）で執拗なまでに追求した、〝客観性〟のあり

方だったと私は思う。

著者は言う。「他の枠組の可能性を認め、それと比較することによつて、唯一の普遍的枠組があると信ずる危険性を避け、常に特殊な状況の中から抽出された枠組を用いながらもより普遍的な方向にむかう無限の努力が可能になると思う。」（四六頁）

二

著者が概念化するための経験の場として、アメリカ、オーストラリア、ソ連、タンザニアが外なるポイントとしてあげられている。もう一つのアメリカ、つまりアメリカの周辺は、著者にとつてはアメリカ・インディアンであつた。それは、日本におけるアイヌの問題と同質の問題として著者の目に映つている。そして、インディアンが民主主義体制下での少数者として、そのルールに組みこまれないだけの内実をもとうとする人びとと著者は正しく感受している。著者の観察と論脈は、私自身のニューメキシコ州アルバカーキでの観察をある程度以上立証してくれていることに、私は満足した。つまり、血としての部族・居住地・登録された部族にそれぞれのインディアンが同一化源をもつているのであり、それらがさまざまに接合し重合する過程で、より一般的なインディアン意識が可能態でとらえられる時、アメリカおよびアメリカ人は、その多元性をどう組みかえるのだろう。

一般論として著者は、「インディアンとしては、ますます自立を強める方向を指向しつつも、自立できる体制をうちたてるために連邦の援助を必要としている。……広汎に連邦政府の援助に依存しながらも、どのようにしてインディアンは自立への歩みを進めることができるであろうか。そこには第三世界の発展途上国と共通した困難な問題がある。否、アメリカ合衆国という巨大な国の内部に包摂されているだけに、一方では援助がえやすいという条件があると同時に、アメリカの枠の外に出ることはできないという点で自立性を強める上で困難な条件もある」（五九頁）と確認する。だが、自立とは「アメリカの枠」の内外を問わず、あらゆる可能性の実験意思の発現とその持続にあるとも言わねばならない。たとえば、アル中撲滅への自己意思的運動が、著者によつて、〝自己尊厳回復運動〟の一例としてあげられている。

つまり、経済的な豊かさの水準での平等に結局は帰着し、その分配量の多寡をめぐる参加になつてしまいかねない《開発・発展の論理》につかみとられない志向こそのみが、人間の発展として高く評価されることに著者の目がむいているところに、私は共感する。

オーストラリアが「静かな大陸」から、充分にダイナミックな社会に変化しつつある、一つの局面を労働組合と政党で切つて見せる著者の作業は、組合と政党が制度的に固着しない社会のありようを描いているのだが、それへの私の関心は他に較べればやや低い。著者の行論は、オーストラリアの「動的性格を規定している最大の要因は、労働組合であること」（一一〇頁）を明らかにし、組合の組織構造とリーダーシップ、組合と政党の関係、それらの問題と〝多文化社会〟とのかかわり、という形で問題を提起すれば、何よりも政

治制度の原初的問題として深い内容をもつはずである。だが私には、むしろ現在のオーストラリアの動的性格を構成するあらゆる制度的側面が、多文化性によつて、どのように再規定されるのか、そしてそれがオーストラリアの人と社会に、いかなる構造変化をもたらすかの方に興味がある。しかし、ここでの著者の分析と指摘は、オーストラリアに接する正当な手がかりを与えていると言わねばならない。

社会主義国家ソ連については、余りにも多くのことが語られている。だが、それが硬い国家としてのイメージを、私たちから取り払うだけの努力をなそうとしてきたか、となると私は否定的である。ソ連が連邦であり、共和国連合の形態を本質的にもつていて、しかも多民族共和である事実を私たちは忘れてはならない。著者が言うように、文化的多様性と強固な統合の問題が、国家形成の人為的側面として、この国もまた例外的でない歴史的現実を明らかにしているのである。

中国が国家建設過程で依然として実験過程にあることは、言うをまたない。それは社会主義が新しい生面を現代的に人間にひらくことになる実験になるのか、予想されるごとくに制度原理としての社会主義に堕ちるかは、ここでは言えない。機構主義＝官僚支配かなまの人間関係＝あいだがらの論理としての社会主義かへの予想は、やはり現代の希望に属している。

タンザニアでの著者は、そこの学生の日本像を媒介としている。批判攻撃の対象としての日本と、畏敬と羨望の的としての日本という両義性が克服できない情況を著者は見てとつたのだが、その認識は、「われわれの第三世界像において、第三世界を全体として簡単に一般化することが危険であると同じように、第三世界の日本像という場合には、国によつて、階層によつて、一様でないということ」（一七四頁）、つまり当りまえのことを当りまえと実認することの意義を強調するところが大切なのだ。

三

日本および日本人についての著者の議論はここでは省略する。ただ一つだけ、すなわち、われわれの思考が著者のいう「尻つぼみプラグマティズム」として、世界の中の日本↔アジアの中の日本↔日本の中のマイホームという形で視野狭窄傾性をもつていることからのふつきりと逆転が、〝戦後〟を特徴づける可能性に結んでいることは、言つておかねばならない。

こうしたさまざまな視点の設定を試みた著者は、どうしても、社会科学の現在と現代的課題にかえらないわけにはゆかない。それは私が本稿のおこしの部分で、それを語らねばならなかつたのとまつたく軌を一にしている。そして、「現代日本の社会科学は危機的状況にある。危機的な社会の現実に対して、充分に批判的な分析を行なつていないからである。」（二四五頁）と著者がおそらく覚悟をきめて指摘したこと、さらに「一方では、現実の社会を科学的に分析する『社会』科学者ではなく、ただ西欧の社会科学理論の紹介をこととする『社会科学』学者が支配的であり、他方では、現実の一部

を『精神なき専門人』として取扱う瑣末主義が横行している」とつないでいることは、とりわけ新しい指摘ではなかろう。

しかし、むしろ、戦後一貫して、あるいは戦前もそうであつたかもしれない、〝現実に就け〟という要求が、社会科学者たちに内面化されないことが問題なのであろう。「日本の社会科学者の多くが現代社会の危機性について意識をもたず、その危機の克服にむけての動機づけを欠いている」（二四五頁）、そうした人間に研究者としての資格を与える、瑣末業績主義の風潮が、〝瀬戸ぎわ〟で社会科学が簡単に崩壊することを予兆している。

あるがままに現実があるのではなく、研究者によつて切り取られ対象化されたものこそが、彼の〝現実〟にほかならないのだから、言つて見れば、彼の〝現実〟は彼の拡がりと深さをただちに露呈してしまう。また、その現実を切り取る〝方法〟も、その人間のあり方を明らかにしてやまないにちがいない。

問題意識がなくても業績はだせる。むしろ、そうしてだされた業績がそのまま業績として評価されるところに、決定的な知的退廃があること、そしてその退廃は必然的に傲慢をまとうことも、われわれは知つている。私が、本書をとりあげねばならなかつたのは、人間の危機は、同時に可能性と結ばねばならないとする確信を、ある意味では、自己解体を常態とするところで、他者と相わたり相まじわる、その手だてのありかを紹介したかつたからにほかならない。それはあるいは、自分がそのために生きるのが学問ではなく、それによつて生きるのを学問とする、その《学問》を、そして自分を、一度は全面否定するだけの決意を要求することであろうか。

ひとが生きているさま、としての文化がなぜかくのごとく気にならねばならないのか。そして《文化》は、決して国家や行政区画・制度・組織などと一意的に結んでいない。それが人間の可能態としての文化なのである。それに確かに気づくために、著者の流浪は私たちに、何かを突きつけているのである。

（田畑書店刊・四六版二五一頁・一七〇〇円）

内山秀夫